
彼女へ送る・澄んだ空・夢のなか

咲季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女へ送る・澄んだ空・夢のなか

【Zコード】

Z8070A

【作者名】

咲季

【あらすじ】

田舎とも言えない。都會とも言えない。そんなどこにでもあるような土地に住むある女子高生の話。私立高校に通う荒山優香は一年生。適当に友達と付き合えて適当に恋もできる。勉強もそこそこで親も普通のサラリー。ただひとつ彼女が周りと違うことがある…それは彼女に恋をしてしまったこと。そんな澄んだキモチを抱く青春ラブストーリー・です。

プロローグ

今日も君の声を探す

今日も君の影を探す

今日も君の夢を見る

いつものバスに乗る君をいつまで見ることができるだらうか

そう。今まで私の視界に君は居続けてくれるのかな？

ただ確かにのはずつとこのキモチは燃え続けるところ

ただ確かなのはこのキモチは誰にも言つことなくただ私の中で燃え
続けるということ

それしか掴めるものは無くてそれすら絶対とはいえない
そんな弱い私が居る

だから空の澄んだ色に惹かれるの。

プロローグ（後書き）

まだまだ稚拙な文です。

頑張ります。

意見など是非聞かせてください。

言つたやえば私も同性愛的なものをもつてゐるのでもう少くともアーティストを書きたいと思います。

朝・汗・しる

汗の匂いが染み付いてとれない。

今朝も日ひつぱい走ったから、だつて彼女が乗つていたんだ。
いつもよつ早いバスで、田んぼの中を走る、そのバスに。

「優香ー！ー！」

暑い日差しと蝉のやかましい声に白日夢を描いていたそのとき、私
を我に返す声がした。

朝の下駄箱の喧騒と言つたら、その声の主を探すのに一瞬とまどひつ
た。

どうやら声の方からして少し行つたところの廊下にいたしかつた。

「朝会うなんてめずらしけれ！いつも時間違つてーーー！」

朝からテンションの高いこの声、同じクラスの秋山千里だ。
小柄な彼女と教室へと自然に歩きだした。

こんな暑い日には彼女の白い肌が映える。

「暑いからさ、ちょっと早いバスで來たんだよ」

なんて親父くさいこと言えないからとつさの言い訳をした。

「そつかあ。もう七月だもんねー！あと夏休みまで何日かなあ？」

なんて彼女のハニカミ笑顔が私は好きだ。

朝から千里に会えるし、彼女にも会えた。

なんだか良い日になりそうだ、とそう安易に思つ。

1-Bの教室に入るとすでに効き過ぎてこるヒアロンの冷氣が汗で
湿つたシャツを冷やした。

「つま、寒つ！」

「おはよー」
「はよーー」

いつもの朝の風景だ。

今日は千里とだつたから前から入つてしまつた。

私は後ろへと鞄を持ち上げながら、行く。

一番後ろの席へと行くと鞄を置いた。

後ろというのはこれだから不便だ。

前から入ると苦労する。

でもそれなりに良いとこもある。私の席は窓際なので良い風が吹く
し・・。

それにこの席からだと彼女は斜め前の前なのだ。
・微妙な位置で話しかけられる位置でないけど

それでも彼女の後姿を見るだけで胸が苦しくなつて何も耳に入らな
くてずつと見ていたくて。

こんな私をおかしいと思つかな?

でも良いんだよ。誰にも言つこともないから。

このキモチがあるだけで、幸せだよ。

なんて想つ。

： それにしても遅い。彼女が何時までたつてもその席に居ないのだ。
教室を見回しても居ない。
朝同じバスに乗つていたし、同じバス停で降りた。

けどその後はさすがに後を追わなかつた。

ガララ・・

「出席をとるぞ——」

野太い声と野太いからだ、担任の藤堂だ。

「ん?? 今日は佐々木は休みか?」

…とうとう来なかつた。

何処で何をしているんだろう…。

「鳥丸、御前何かきいてるか??」

担任つて誰かが休みだつたり遅刻だつたりすると必ず仲の良いと思われる人物に話を聞こうとする。

鳥丸雄大、神田りさの幼馴染。

「えー 何も聞いてないですよ。」

だるそうに答える鳥丸、二人は付き合つてるとか噂されてるけど本当なのか?定かでない。

「そうか。またまにはこうこう日もあるだろ?」
ギシギシと苦しそうに呼吸する藤堂が発した言葉、なんて無責任なんだろう。

しかしこういう奴なのだ。

だからあまり好きでない。藤堂。少しばかり心配したりよ…。

「…荒山???」

「へ??」

いきなり声を掛けられたからかなりびびつた。

鳥丸だ。奴は私の隣だつたりする。

「いや、なんか怖いオーラだしてたから。」

…顔にでるタイプなのかもしれない。

「なんでもないよー!」

「そう?」

じやあ授業を始めるぞ——

て話し終わりかよ！…………？？？？？？
教室には藤堂の息苦しげ声と教科書を出すパタパタといつ音だけが
響く。

「今日は67ページからだなー」
「古文の予習ノート今日提出だぞー。」
・なんて・
もうみんなの頭にはヤベヨシユウナンテシテナイ！！
・なんて・
ことしか無いんだろう。
その点私はひやんとやっているんで余裕だけど。

…それよりも…なんで神田りそは休みなのか…。
それしか頭に無かった。

時間の過ぎるのがやけに遅くて。
早く口が傾かないかな。
凄く息苦しいぞ。

朝・汗・しろ(後書き)

長
い。
。

存在・嘘

蝉の声は衰える事を知らなかつた。

三時間目が始まりのチャイムとともに皆が席をつく瞬間だけ、蝉の声は焼き消された。

ガンガンに冷えたこの教室に蝉の声は不似合ひだつた。

いつもと変わらない風景。

しかし今日は彼女が居ない。

「じゃあこの問題、宝さん、解いてみて」

カツツ、カツ。

チョークが削れる音がする。

そして横で顔を覆い隠すようにつぶせになつてている鳥丸の寝息が聞こえる。

：：：この気持ちはそのまま寝息がこのときだけは私のイライラを増幅させていい事に当の本人は気づくわけはない。

カツツ、カツ、、、

音が止まる。

「…」

沈黙が漂う、解けないなら早くそういういなよ。

何かを聞いていないと、今の私は平静を保てない。

「…」

チツ、

軽い舌打ちの後私はゆっくり椅子を引いた。

その私の行動に反応するよつて鳥丸はむづくつと起きた。

「先生、保健室行つていいですか？」

皆が一斉に私を見た。

「あら？ どうしたの？ 荒山さん」

「あの・・・」

しまつた。言い訳を考えていない。

「お腹が、痛くて・・・」

軽く先生が右眉を吊り上げた。

「...分かっただわ。行つてらっしゃい」

「...ありがとうございます」

あまりにも言い訳がベタだつたかな。

それでも鳥丸は心配そうな目でこちらをみていた。

鞄を右手に提げていてことに不審を微塵も感じていない目だった。

「荒山大丈夫か？ 一緒に行つてやろうか？」

どうやら本氣で心配してゐらしい。しかし今の私には悪いけど疎ま
しい。

顔に似合わざいいやつ。ああいう男に女は弱いんだろうな。

「ありがとう。でも大丈夫だから」

何かから逃げるように急いで、足を潜めて教室を後にした。

扉を開ける音がやけに大きく感じた。

廊下には私の足音だけが響いて、

靴を落とす瞬間に妙な寂しさを覚えて、
雨も降りそうに無い空を認めた、

お腹が痛いなんてホラをよく吹いたな自分。

だって仕方ないじゃん。神田りさが居ないんだから、勉強どころじ
やなかつた。

そう、私は誰も知らないうちに彼女に支配されている。

今、このコンクリートを蹴つて いる瞬間も

今、昼下がりの商店街の主婦たちを横目に見ている瞬間も

今、コロッケの上げたてのにおいを感じている瞬間も

何処かに彼女の姿がちらつく。

ブーーンブーーン

スカートのポケットに突つ込んでいた携帯がなつた。

クラスの女子から心配のメールだ…。

返信をするのが疎ましくて時間を確認して携帯をまたポケットに突つ込んだ。

鞄の重さの大部分を占めているお弁当を処理するために私は近くの川原に行くことにした。

12時なんて真昼に帰宅したら母が五月蠅く言つだらつから、家には帰れなかつた。

「神田りさはどこに居るんだら？」

川原に向かう今ですらその想いがちらついていた。

夢・川

太陽が人間の真上を光る真昼の日に制服を着た女子高生が一人川原でお弁当だなんて、なんだか滑稽だなんて思う。

この時間帯は暑すぎて誰も川原に居なかつた。
川の流れは穏やかで、キラキラと光る水面があつた。
土手から下に降りるとき、草の匂いが激しくした。
少しジメジメしたそこで、一際土の匂いがたつた。
少し急な斜面を足をブレークにして降りる。

ちょうどいい感じの草の生えていないところにきたのでそこで鞄をおろした。

ここらへんがちょうど木があつて陰になつていて、お弁当を食べるのにちょうどいい気がした。

「う・・ううん」

ビクつと自分の肩が上がつたのが分かつた。

誰も居ないと思った木の陰に既に先客が居たようだ。。。
でもこんな時間に木の下で昼寝なんて、ろくな人間で無いと思った。
。

浮浪者か？？ヤンキーか？？

その先客はぬつと起き上がつた。

それとともにあらわになつたその姿に私は驚いた。
つていうか…

その身にまとつて いる制服

同じ高校の生徒つて事に驚いたし

声から分かる若い女の声つてことにも驚いていた。

それに加えて…ずっと私の頭の中に居たから頭がおかしくなつて錯

覚を見たのかと思った。

だつてまさか万に一も会えると思つていなかつたから…。

「うーーー？ 荒山さん？？」

その寝ぼけた声は私が求めていたもので。

「なんで此処に居るの？？」

その顔は私が求めていたもので。

神様のイタズラ だとか信じないけどもそれだと少し思つた。

「いやーーー神田さん！」 なんで？？

そう、そこにいたのは紛れも無く学校に何故か来ていなかつた神田
りさだつた。

「わたしは・・ただの昼寝だよ」

「うとぼけた顔で彼女は言つた。

そのはにかんだ笑顔が、水面の光を浴びてキラキラと光つていた。

「荒山さんは？」

そうやつて普通の会話をしていることが信じられなかつた。

「わたしは・・・ただのサボリ」

「はははは。荒山さんでもサボることあるんだね」

「そんなんにわたし真面目そう？」

ヤバイ、嬉しそうに顔の筋肉が緩みまくつている…。
きつとひどい顔してゐる。

「うん。たぶん」

そのたぶんつて言葉に少し引っかかりを感じたけど仕方ないことだつた。

だつて彼女とこんな風に一人で話すのは初めてだつたから。

「そうかな？？」

少しの沈黙が流れる。

此処は静かで、時の流れが遅く感じる。

それでいて暑さを感じるのだから、夏つて嫌い。

彼女の頬に一筋の汗が流れた。

それに見とれているちょっと変態的な自分に気づきながらきづかん
いふりをしてた。

ふいっと私の視線に気づいた彼女がこっちを向いた。

「・・なに？」

「いや・・なんでも」

なんでも つてなんだよ・・。

下手な言い訳もできない自分の脳みそを憎んだ。

さつきの穏やかな沈黙とはまた別のそれが流れた。

それに耐え切れず何か声を発しようとしてでたのが
「そういえばさ・・今日なんで学校来なかつたの？」

これだつた。

遠くを見つめるその瞳は何にも動じる」となく一点を見つめていた。

「・・・私さ」

「え？」

自分でも驚くほど早く反応した。

「此処で見る夕日好きなんだよね」

ふとそちらをみると何も夕日が上がりそうな風は無かつた。
それでいて澄んだ空の色が彼女のみつめるものだと思つことにも出来なかつた。

「わたしは空・好きだよ」

無意識にそういうたのは何故だろ？

口が勝手に動いた。

「・・・わたしも好き」

ドキつとした。

これぞ妄想族・・。

でも彼女が同意してくれたことが、何だか共有を許されたようでもそばかつた。

ゆらゆらとゆらめく大きな木の葉を、横に。
少し傾いた太陽を上に。

ボーッとしているとドサツといつ音がした。

彼女が横になつたのだ。

学生鞄を枕に、まぶしいのか手のひらを太陽にかざして。

「ねえ。寝ても良い？」

何故そう聽くのか理解出来なかつた。

でもなんとなく許可しない理由もないの、いいよ、とただそれだけ言つた。

するとすぐに寝息が聞こえた。きっと疲れていたんだろう。

口数も少なく、眠る彼女は幼児のように可愛い顔で眠つてた。

ただわたしはその寝顔を見つめていたんだ。

自分の心臓の音が漏れないか、それだけを不安に思い、貴女と居る幸せを感じている。

さりげなく無視された質問の答えがやはり気になった。
それでも気にしないふりをするのはわたしが弱いから。
それだけのこと。

機械的に動く自分の脚を見つめて歩くのだけど、横断歩道の信号がちょうど赤になつて止まつた。

横に居る貴女の瞳はやはり一点をじつと見つめていて、それを追うように見上げた空にすっしりとゆらめくその赤は信号の赤よりも、リアルに感じられた。

太陽・寝息（後書き）

いや～なかなかサボらずに書いてますね～・アセ

誰か読んでるのか？ワラ

良ければ感想クダサイね！！

体験談（？）なども聞かせてくれたらありがたいです　w

夕日・夕暮れ

彼女はグッスリ1時間睡眠をした。

「うつそ！？ そんなに寝てた！？」

「ホントホント！？ ほらもうこんな時間！」

時計の針は5時をさしていくと、ぐるぐる暑さも弾けていて、夏虫の声が響き始めていた。

「あ～なんかつつき合わせちゃつていいもんね～」

「いいよ～。わたしも暇だったんだから～」

れつきより肌が少し焼けていた彼女は、眠そうにあくびをしてすくへと立ち上がった。

「帰ろっか

すつきりお田寝めなのか、あくびの力なのか、腹から声が出ていた。

「うん」

夕暮れのなかわたしたちは歩き出した。

「…ねえ」

「え？」

「明日は学校くるよね？」

密かで、一番聞きたかったことを率直に聞いた。

少し戸惑ったような顔をした瞬間、何だか罪悪感のようなチクチクしたものが走った。

聞こえていた夏虫の声も、川原をぬけて草原が無くなつて少しすつコンクリートの地面になつて、車が走るようになると車の騒音のせいなのか、それともそれ 자체が居なくなつたのかわからないけど、全く聞こえなくなつていった。

そんなことを考えながらコンクリートの地面に続く一本道をずっと歩いていると彼女がこちらを向いた。

「・・・うん。もちろん」

そう言ってエクボができる、少し安心した。

「そつか・良かつた」

本当の気持ち、『まかさず』に言った。

「荒川さんってさ・・・優しいね」

「え？そ・そう？」

「うん。そう」

ありがとう、そう言うと彼女は不思議そうな顔をした。

あつたかそつた彼女に触れることはなかつたけれど、並んで歩いているんだね。

自分の心臓の音が漏れないか、それだけをただ不安に思い、貴女と居る幸せを感じている。

さりげなく無視された質問の答えがやはり気になつた。

それでも気にしないふりをするのはわたしが弱いから。それだけのこと。

機械的に動く自分の脚を見つめて歩くのだけど、横断歩道の信号がちょうど赤になつて止まつた。

横に居る貴女の瞳はやはり一点をじっと見つめていて、それを追つように見上げた空にずっととめりあらめくその赤は信号の赤よりも、リアルに感じられた。

夕日・夕暮れ（後書き）

ヤバイです・今・ヤバイです
黙れってね・ワラ

読んでいただきありがとうございます・

眠・欲

現実世界に居るってことは理解していて、それでいて夢を見ているのかがハツキリしない時がある。

そういう時は決まって眠いとき。

眠りの世界へと引き込まれるその一瞬。

私のカラダは、階段を踏み外したような、床の底が抜けたそうな、そんな感覚をときたま感じる。

そんな時、カラダはビクッと一瞬痙攣し、時には声が出る。

そんな現象。よりによつて授業中に起つるなんてね。

その日は効きすぎた冷房に体を冷やしたせいかやけに口差しがいい感じにあつたかくて、ついついウトウトしてしまつた。

ああ、寝そう。隣の席の鳥丸の視線が少し気になるけど少しひらい寝ても構わない、そんな気の緩み。

それが命取りになつた。

ガクツつと体が下に沈む感覚に襲われて驚きのあまり「あつ！…！」と声を起こしてしまつたのだ。

それに加え体制を整えようと体に力が入つたため、思わず立ち上がりつてしまつた・…。

「荒川さん？」

シーンとした教室に冷ややかな先生の声が聞こえた。

クラス中の視線が黒板の前に立つ女教師から私に移る。

この感覚。前にサボリをしたときより痛いのは氣のせいで無い。

「荒川さん? どうしたんですか?」

鳥丸が自分のことの様に緊張した顔つきでこちらを見ている。

千里は退屈な授業が中断して少し嬉しそう。

神田りさはただ私をじつと見ている。

クラスのみなも私の発言に注目をしている。

この状況で上手い言い訳を思いつくことのできない自分を憎みつつ
いうことにする。

「寝てました」

クラス中にワツと笑いが溢れる。

バカ正直に言つとは思つていなかつたんだろう。

恥ずかしさでいっぱい誰の顔を見るわけでもないのに、ただ斜め
前の時計を見上げてた。

あと少しで授業は終わる。

「静かに! -! -」

先生の一言で教室はシーンと静まりかえった。

そしてクラス中をにらみつけたあと標的はもうひとつに移る。

「荒川さん・・

ほらね。

「放課後、職員室に来なさい。」

はいと氣の抜けた返事をしたあたしをまたにらみつけた。

日が暮れる

私が居眠りの件についてみづちつしほられたときには、時計はすでに6時を回っていた。

しかし、外の明るさはまったく変わらず、と言ひほどでもないが、まだ夕日が顔を出しているぐらいでまだまだ夏の衰えを感じない。夕日の日が差し込む教室に鞄を取りに向かうと其処に人の気配はなかつた。

「…やつぱり誰も居ないか…」

そう漏らすと誰かの声がした気がした。

「荒川さん？？」

「はい！？？」

急に声を掛けられ驚いた私の返事は裏返つたものだった。後ろを振り返ると彼女が立つていた。

「こんな時間まで怒られたの？」

人懐っこい笑顔で笑う彼女が言つ。

「うん。まあ仕方ないよね

「荒川さんはいいなあ。樂観的で」

そういってクスッと笑つた。

「そんなことないけど・・・」

つて言つ私。本当は一緒に居れて嬉しいくせに。自然と私達の足は校門へ向かっていた。

「なんでこんな時間まで残つてたの？」

「え・・・うふ。ちょっとね」

彼女は隠し事が下手だと思つ。すぐに視線をそらすから。

「今日は家に帰りたい気分じゃなかつたから」

うつ伏せたその瞳が遠くを見つめる。

「うふ。もうこの日もあるよ」

コンクリートの地面を踏んで私は教室から見た夕焼け空が少しづつ暗くなつていくのに気づいた。

「いや、いつは流れるんだね」

そう言つと彼女はポカンとした顔でこちらを見つめた。
この僅かな沈黙と彼女の視線に堪えられなくなつた私は話をやめ
うとした。

「うん・・・そうだね」

思いがけない返事が嬉しかつた。

他愛も無い好きな音楽の話とかドラマの話とかテストの結果とかそ
んな普通の会話がとても大切だよ。

彼女と別れるこの交差点で私は彼女とさよならした。

「じゃあ、また明日ね」

「うん。ばいばい」

そう言って二つつと笑った彼女の顔は私の知らない顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8070a/>

彼女へ送る・澄んだ空・夢のなか

2010年10月15日23時45分発行